

探究的な学びを支援する 社会科地域学習用デジタルコンテンツの開発と活用 - 「のん太の学び場」と「東広島市立図書館連携講座」の場合 -

守谷 富士彦*・大坂 遊*・篠田 裕文**・青本 和樹**・
高見 史織***・正出 七瀬***
(2019年12月9日受理)

Development and Application of Social Studies Digital Contents for Inquiry Based Learning:
A Case of “NONTA’s Classroom” and “Higashi-Hiroshima City Library Collaboration Seminar”

Fujihiko Moriya, Yu Osaka, Hirofumi Shinoda, Kazuki Aomoto, Shiori Takami and Nanase Shode

The purpose of this study is to develop digital contents that support inquiry based learning and to propose application examples of “local community studies” conducted in Japanese primary social studies education. For this reason, we set up a development project team by researchers and university students majoring in social studies education and developed digital contents over a year. In this project, we formulated five “design principles” for development. The contents were envisioned in consideration of the format, cooperation with social studies textbooks and supplementary readers for community studies, correspondence with the course of study, and the fairness of the areas handled. Finally, the digital contents which name is “NONTA’s Classroom” was developed and 10 keywords were released on the website. Along with the release, in cooperation with Higashi-Hiroshima City Library, we invited local elementary school students to use the digital contents and learn and verified the application and improvement of digital content. As a result of this research, 1)we conceived the design and concrete contents and structure of digital content that supports inquiry based learning and developed it. Also, 2)we specified an example of how to apply and confirmed its effectiveness.

Key words : social studies, digital contents, inquiry based learning, local community studies

1 はじめに

(1) 初等社会科における地域学習の意義

本稿では、学校内外での地域学習において探究的な学びを支援する社会科デジタルコンテンツの開発を行い、その活用例を示すことを目的とする。本稿で開発するデジタルコンテンツは、主として小学校第3学年および第4学年の学習内容である「地域学習」において社会科副読本を補うものとしての活用を想定している。

初等社会科カリキュラムは、第1・2学年の生活科で学校・家庭から始まり、近隣、市区町村、都道府県、国、世界・国際社会へとより大きな社会集団に広がっていく同心円拡大原理に基づいて編成されている。山根(2000)によると、この配列方法には理論的に2つの内容が含まれている。すなわち、第1に、子どもの発達にしたがって、「社会認識は空間的により離れた事物、あるいは大きく遠い地域の学習へと進む」こと、第2に、

*広島大学教育ビジョン研究センター教育研究推進員, **広島大学大学院教育学研究科博士課程前期,

***広島大学教育学部

子どもの発達にしたがって、小さな社会集団から大きな社会集団に広がっていくこと、である。

このような同心円拡大原理に基づく初等社会科カリキュラムの中核であり、象徴的な役割を果たしているのが、子どもたちの暮らす身近な地域社会の学習(以下、地域学習)である。安藤(2010)によると地域社会には、地域で生活する人々や地域で働く人々、地域の商業施設・公共施設・歴史的建造物・田畑や森林・工場などが複雑に入り混じって存在し、それらが相互に関連し合い、補完し合って社会生活が成立している。小学校中学年の地域学習においては、この身近で複雑な社会の学習を通して子どもたちの学力の統一的な育成を目指す、地理・歴史・公民領域を統合したカリキュラムとなっているという特徴がある。

(2) 地域学習における副読本の現状と課題

地域学習においては、各市区町村により発行される社会科副読本を使用して授業が実施されるほか、副読本を活用して社会科見学や長期休業期間の課題が構想されることが一般的である。このように、小学校地域学習において重要な位置を占め、かつ地域ごとに特性の異なる社会科副読本に関しては、断続的に研究がすすめられてきた。しかしながら、岡崎(2018)によると、副読本の開発は「特定の設計理論や方法があるわけではなく教員個々の能力、経験に頼っているのが実態」だとい、開発に関する理論的な蓄積は限られている。

さらに岡崎は、副読本はデジタル化も進んでいるが「インターネット上で公開されている副読本は、紙媒体の本文や資料構成をそのまま PDF や HTML 形式で提供している形態がほとんど」という。岡崎の指摘をふまえると、紙資料・画像資料としての社会科副読本や、HTML 化された社会科副読本には以下の3点の課題が指摘できる。

第1に、学習設計の課題である。社会科副読本は、地域の特色に関する解説文章とその理解を促す資料を提示する「説明型」をとる場合が多い(岡崎, 2018)。このタイプの副読本は、探究・分析のための視点を教師が提示しないと、学習者である子どもは副読本を単なる読み物として捉えてしまう危険がある。副読本を活用するために、資料と本文をつなぐ「問い」を提示し、探究的なプロセスを補う必要がある。

第2に、学習目標の課題である。永田(2000)が指摘するように、かつて郷土学習とも呼ばれていた地域学習は、子どもが暮らす身近で愛すべき

地域＝郷土の特色を理解すること自体が目標とされやすい。社会科副読本は、その支援のための教材として位置づけられる傾向が強いため、地域社会の分析を通じた社会認識の形成や社会的見方・考え方の活用、地域課題の発見といった社会科教育上の重要な目標が見落とされがちとなる。

第3に、情報の質の課題である。通常、副読本は紙媒体で刊行されるため、更新頻度が限られてしまい最新の情報が反映できない。また、動画などの映像資料が掲載できない、関連資料や web サイトへのアクセスが不便といった、紙媒体ならではの課題もある。これらは、副読本をインターネット上で公開することで一定の克服はできるものの、紙媒体と web 上の情報に齟齬が生じるなどの別の問題が発生することになる。

これらの課題に対応するためには、地域自治体が監修・刊行する副読本だけでは不十分であり、副読本の機能を補完・強化する別の教材を開発する必要がある。

(3) デジタルコンテンツの開発・活用の意義

そこで本稿では、これらの課題に応えるために、副読本と併用して活用できる、インターネットを活用した web 上の教材集を開発し、それをデジタルコンテンツと呼んでいる。メディア教材の特性を生かし、社会科教科書や副読本と組み合わせることで、子どもたちが常に幅広く最新の情報にアクセスしながら、主体的に地域社会について探究することが期待できる。

以下、第2章では、開発したデジタルコンテンツのデザインと特徴を明示する。第3章では開発したデジタルコンテンツ「のん太の学び場」(以下、「のん太の学び場」と記述する)の具体的な構成について紹介する。第4章では、市立図書館と連携して実施した「のん太の学び場」講座を事例に活用方法を説明する。第5章では、このデジタルコンテンツの開発・活用の展望を描く。

2 デジタルコンテンツのデザインと特徴

(1) デジタルコンテンツのデザイン

デジタルコンテンツの開発に向けて、広島大学で社会科教育を専攻する教員、学部生、大学院生6名によるプロジェクトを立ち上げた。2018年9月から、メンバーで定期的にミーティングを実施し、どのようなフォーマットが望ましいか、どうすれば社会科教科書や副読本と組み合わせながらより効果的な探究が期待できるかといった点を検

討した。その結果、まずメンバー間で表 1 に示す 5 つの「デザイン原則」を策定し、この原則をふまえたコンテンツ開発を行うこととなった。

表 1 デジタルコンテンツの「デザイン原則」

- ①小学校 3・4 年生の地域学習用社会科副読本を参考にカテゴリーとキーワードの選定を行う。
- ②文献・デジタル・リアルな社会を行き来する学びのモデルを提案する。
- ③探究的な学び（課題発見・課題解決学習）を支援する学習課程を構築する。
- ④持続可能な社会の担い手として発信できる力の育成を重視する。
- ⑤子どもの自由研究や市民の生涯学習など社会教育の場として活用可能にする。

（筆者作成）

上記の「デザイン原則」に基づき、10 のカテゴリーの構想、カテゴリーにもとづく 30 のキーワード案の選定、探究過程の構造とレイアウトの統一、学習テーマに関する問いの構造の作成、テ

マに関する素材の収集や作成、コンテンツの HTML 化、表現の統一、というプロセスでコンテンツ開発を進めていった。なお、開発に際しては、上記の「デザイン原則」に加え、2017 年度告示の新学習指導要領の内容に配慮したカテゴリーを設定すること、取り扱う地域の偏りを避けること、都市部と農村部の両方を扱うこと、などの点にも留意した。

(2) デジタルコンテンツの内容・構造・特徴

このような過程を経て開発されたデジタルコンテンツは、表 2 に示すような 10 のカテゴリーと 10 のキーワードで構成されている。これらはそれぞれが独立した学習単元として構成されており、1 カテゴリー／キーワードあたり数時間で学習されることを想定している。いずれの単元も、現行の学習指導要領や副読本の記述にも対応しており、社会科の学習において円滑に活用できるよう配慮している。

表 2 デジタルコンテンツの構造と学習指導要領との対応関係

カテゴリー名	キーワード名	取り扱う内容	該当する学習指導要領の項目
1 わたしたちの町のすごいところ	酒づくり	地域産業が発展する要因	4- (5) 県内の特色ある地域の様子
2 わたしたちの町のなまえ	河内	地名の地理的・歴史的意味	3- (1) 身近な地域や市区町村の様子
3 地いきの自然とともに生きる	ため池	防災や治水から見るため池の機能	4- (3) 自然災害から人々を守る活動
4 人やものを運ぶ乗り物	瀬野八	地理的環境が交通に及ぼす影響	4- (5) 県内の特色ある地域の様子
5 田畑・工場・お店ではたらく人々	農産物直売所	地域における産業の多様性	3- (2) 地域に見られる生産や販売の仕事
6 伝統・文化を受けついでいく人々	子どもかぶき	地域における伝統・文化の創造と継承	3- (4) 市の様子の移り変わり 4- (4) 県内の伝統や文化、先人の働き
7 健康できれいなまちをつくる	ごみ袋	ごみ処理費用の負担のあり方	4- (2) 人々の健康や生活環境を支える事業
8 安心してらせるまちをつくる	消防署	消防署の機能	3- (3) 地域の安全を守る働き
9 人々の努力と地いきのうつりかわり	藤原春鶴	地域における石碑（記念碑）の意義	4- (4) 県内の伝統や文化、先人の働き
10 広島県と世界とのつながり	広島大学	大学の機能	4- (1) 都道府県の様子

（筆者作成）

また、各キーワードは、地域社会の理解を乗り越え、産業や交通、文化といった社会の一般的(普遍的)な概念に関する認識を形成するための学習テーマと題材が選択されている。そのため、3・4年生の身近な地域の学習での活用だけでなく、5年生の産業学習や6年生の歴史・公民学習でも活用されることを意図している。

(3) 各キーワードの内容・構造・特徴

各キーワードは、「導入部」「展開部」「終結部」という3部構成になっている。(図1)

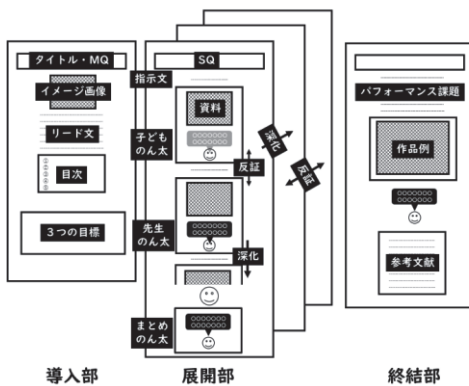


図1 各キーワードの探究構造
(筆者作成)

「導入部」は1ページで構成され、キーワード全体に関する導入となっている。冒頭にタイトルと全体のMQ(中心発問)がある。その下にキーワードに関する身近なイメージ画像と子どもの既存知識をゆさぶるリード文の問いかけがあり、問題意識と学習意欲を創出する。

その下に探究の目次、その下には学習の目標が示されている。目標は学習者ではなく、学校現場の教師や保護者などの活ユーザー向けに書き、ワークシートを有するキーワードの場合はワークシートの解答がダウンロードできる。目標は、学習指導要領の「1. 知識・技能」「2. 思考力・判断力・表現力」「3. 学びに向かう力・人間性等」の3点に分けて記述されている。

「展開部」は、3~6ページで構成され、キーワード探究の中核部である。各ページの冒頭には、MQに対するSQとなる問い形式のタイトルがある。それを解決していくために、敬体で書かれた指示文がある。指示文は端的に明確な指示を時に

疑問語を交えながら書かれ、学習者はそれに沿って探究を進めていく。指示文の下には学習のコンテンツがあり、資料とその解説文で構成されている。資料は写真のほか動画や人々の語りなど主観性・ストーリー性を有しつつ理解しやすい特性をもつ資料や、地図やグラフなど客観性を有し分析するデータ情報となる資料もある。難解な資料は模式図や構造図などのモデルとして表すことで、学習者の理解を助ける。

コンテンツには、「子どものん太」と「先生のもの太」の2つのキャラクター(のん太は東広島市観光マスコット)が登場し、その役割が異なる。「子どものん太」は、資料を分析する際、子どもの疑問を代弁したり、素朴な考えを示したりする役割がある。「先生のもの太」は、資料の分析から分かることを解説したり、ページのまとめをしたりする役割がある。

この指示文・「子どものん太」の疑問・資料・「先生のもの太」の解説の4要素が基本的なコンテンツセットとなり、それが繰り返されながら探究が進む。各ページではコンテンツセットが2回以上繰り返される。そのセットとセットの間には、探究が深まるように「深化」に向かう探究と「反証」的な探究の2つの関係性が設定されている。ページの最後には、冒頭のタイトルSQのSAにあたるまとめが書かれている。「先生のもの太」が登場し、ポイントに絞った簡潔なまとめを行う。

以上のような1ページを、複数回繰り返すことで、キーワードについて探究する。各ページ間においても、先と同様に「深化」に向かう探究と「反証」的な探究が設定され、より学習を発展させていくことができる。

③「終結部」は、1ページで構成され、学習の成果を表現する場面である。タイトルでは「~しよう」という意志の助動詞で表現され、パフォーマンス課題を示している。パフォーマンス課題は、①キーワードに関するまとめ・解説型②キーワードがもつ地域の課題の解決策提案型③自ら調べ表現する作品づくり追加探究型の大きく3つの類型がある。

その下には、敬体の指示文でパフォーマンス・課題としてどのような課題に取り組みばよいのか具体的に説明している。学習者はその指示に合わせて課題に取り組むことで、その学習の成果を評価しつつ、評価を通してさらに地域理解を深め、地域社会に発信し行動する市民としての資質・能力を成長することができる。

課題の下には作品例が示され、学習者の学びを保証している。その下には、「さらに学びたい人へ」とし、発展課題が設けられている。

その下には参考文献や参考 web サイトを並べ、自ら学ぶ手助けをしている。探究をつくるために参考にした図書・web サイトを示すほか、自習に活用できる web サイトなどを紹介した。文献は地域の図書館に所蔵されている資料をできるだけ多く選定した。

3 デジタルコンテンツ「のん太の学び場」詳細

以上の構想を経て実際に開発されたのが、東広島市立図書館および広島大学教育ヴィジョン研究センター（EVRI）が共同で開発した地域学習用デジタルコンテンツ「のん太の学び場」である。

「のん太の学び場」は、2019年9月に表2に示す10個のキーワードに関するページを公開した。web サイトは、https://trc-adeac.trc.co.jp/html/Home/3421205100/topg/study/main/main_1.html から閲覧することができる。web サイト上では10のカテゴリーは明示されていないが、今後も各カテゴリーに対応するキーワードを公開していく計画である。

以下では、10のキーワードについて(1)中心発問(2)授業のねらい(3)探究の概要の3点を整理し紹介する。

【キーワード① 酒づくり】作成者：正出七瀬

(1) 中心発問

なぜ西条で酒づくりがさかんになったのだろう？

(2) 授業のねらい

日本酒の醸造を事例に、伝統的産業が発展した地理的・歴史的背景を考察し、自身が居住する地域への理解と愛情を深めることができる。

(3) 探究の概要

導入部では、冒頭で「酒都」と呼ばれた歴史や、観光客など酒造りに関する話題を提示する。その上で「日本酒はほかのお酒とどこが違うのでしょうか。」や、「西条ではいつからどんな理由で酒づくりがさかんになったのでしょうか。」という課題を示し、必ずしも子どもにとって身近ではない日本酒の醸造が地域の伝統的産業であることを意識する。

展開部は、大きく4ページで構成される。「①お酒って何かな？」では、アルコールという概念を水との違いから明確化した上で、その効果と未成年は摂取が法的に禁止されていることを確認す

る。さらに、「②日本酒の原材料はなんだろう？」では、他の酒と日本酒の違いに目を向ける。東広島市の主要産物である米が主な原材料であることに加え、発酵についても発展的に取り上げる。続く「③日本酒づくりで有名な場所は西条以外どこがあるのかな？」では、西条以外でも日本酒が有名な地域があることや、科学技術の発展により前近代には日本酒の製造が困難であった地域でも現在は日本酒が作られていることを理解する。「④西条酒の歴史を考えてみよう！」では日本酒に関する略年表を使用し、日本酒の歴史における西条酒の位置付けを考える。市内の小学校で使用されている社会科副読本『わたしたちの東広島市』も併用し、西条の酒造りの発展の理由を自然条件や時代背景から考察する。具体的には前ページで既出の兵庫県灘や京都府伏見との水質の比較のほか、三浦仙三郎らによる軟水醸造法の考案、鉄道の開通など背景としての自然条件や近代化を学ぶ。

終結部は、「⑤西条酒の『すごいところ』を伝えるパンフレットを作ろう！」というパフォーマンス課題である。展開部までで学んだ西条酒に関する内容のうち、児童自身が関心に応じた「すごいところ」をより深く探究するための課題であり、地域の図書館などでの調べ学習を促す。

【キーワード② 河内】作成者：守谷富士彦

(1) 中心発問

なぜ河内町を「河内」というのだろうか？

(2) 授業のねらい

河内という地名の意味から、河内町における自然環境と人文環境の関わりを考察し、地域の自然と歴史に関心をもつことができる。

(3) 探究の概要

導入部では、居住市内であっても訪れたことのない地域があることを自覚化し、実際に訪れなくても地名の意味を考えることで地域の様子をイメージできることを知る。

展開部は、大きく6ページで構成される。「①河内町の読み方は？」と「②『河』と『内』の読み方と意味は？」では、地名に入っている漢字を辞書で調べる活動を通して、大きな川のまん中のほうという意味であることに気づく。「③空から河内町をみてみよう！『大きな川を中心』はどこかな？」では、河内町周辺の航空写真を読み解き河川が集まった地域を探す作業を通して、そこが河内町であることを確認する。「④川が近くにある生活のイメージは？」では、実際の河内町における

河川周辺の景観写真を読み解くことを通して、土地利用や産業について理解する。具体的には、清流を活かした醤油工場や川魚つかみの祭り、河川に削られた斜面を活用した棚田や果樹園、洪水の危険性などについて理解する。「⑤ココも河内??」では、河内町の大字ごとに景観写真を読み解くことを通して、行政的境界によって区分された河内町の中には④で確認した自然条件には当てはまらない反証的な地域も存在することに気づき、地域の多様性を感じる。「⑥日本各地にある「河内」をみてみよう!」では、東広島市外にある「河内」という地名の地域の航空写真を読み解くことを通して、河内という地域の自然環境を一般化し、その要因について考察する。

終結部の「⑦河内町の特ちょうを図にまとめ説明しよう!」では、展開部で学んだ知識を活用し、河内町の自然環境と人々の自然環境の関係性についてポスター図にまとめて説明文を書き加えるパフォーマンス課題に取り組む。

【キーワード③ ため池】作成者：青本和樹

(1) 中心発問

なぜ東広島市はため池が多いのだろう?

(2) 授業のねらい

ため池に関する資料の考察を通して、ため池が造られる条件を自然環境と歴史的背景の視点から説明し、ため池の保全や活用について提案することができる。

(3) 探究の概要

導入部では、市内に居住する子どもたちにとって身近にある池の多くは、ため池という池であることを意識する。

展開部は、大きく4ページで構成される。「①ため池って何だろう?」では、東広島にあるため池の写真を見て、ため池と普通の池との違いやため池の機能について理解する。「②東広島にはため池がどのくらいあるだろう?」では、ため池の個数を表したグラフ資料を読み取り、全国的に見ても中国四国地方、中でも特に広島県はため池が多いことに気付く。さらに、広島県の中でも東広島市には多くのため池があることを説明する。「③なぜ東広島市ではため池が必要なのだろう?」では、ため池の個数と降水量を表す資料を読み取る。中国四国地方におけるため池が多い県と少ない県を比較し、降水量が少ない県にため池が多いことに気付く。その上で、江戸時代に水不足対策で広島県にため池が多く作られた歴史的背景を説明し、

農業用であることを知る。「④雨の少ない地いきでは、必ずため池の数は多いのだろうか?」では、③と反証的に降水量が少ない広島県の中でもため池が多い地域と少ない地域があることに資料から気づき、河川の流域面積と河川の流量の違いを比較した資料を読み取ることで「大きな」河川がないこともため池が多くなる要因であることを知る。さらに、他の地域も調べてみることで、降水量が少ないことと、「大きな」川がないことがため池が多く造られる条件であることを一般化する。

終結部の「⑤身近なため池を調べて『○○池紹介ポスター』をつくろう!」では、展開部で学んだ知識を活用しつつ、実際に調査を行い、子どもたちの身近にあるため池について、自然環境や歴史的背景から説明するとともに、どのように活用されているか、今後どのように活用していくかについて、ポスターにまとめて説明するパフォーマンス課題に取り組む。

【キーワード④ 瀬野八】作成者：青本和樹

(1) 中心発問

「瀬野八」ってどんな場所だろう?

(2) 授業のねらい

山陽本線の瀬野駅と八本松駅間、通称「瀬野八」を事例に、地理的な制約を受けるところに鉄道が敷設された理由を歴史的な背景から考察し、その克服方法を説明でき、地域の特色を発信することができる。

(3) 探究の概要

導入部では、市内に居住する多くの子どもたちが利用するJR山陽本線の瀬野駅と八本松駅の区間が「瀬野八」という通称で呼ばれ、有名な区間であることを意識する。

展開部は、大きく3ページで構成される。「①瀬野八ってどんなところだろう?」では、実際に電車が走る動画を観察し、「瀬野八」を走る貨物列車は先頭だけでなく後ろにも機関車が連結されていることに気づく。実際に瀬野駅と八本松駅の標高からどのくらい急な坂であるかを確認し、「瀬野八」は鉄道が走行することが難しい「鉄道の難所」であることを理解する。「②なぜ難所に鉄道をつけたのだろうか?」では、「瀬野八」を含む山陽本線の歴史を年表で確認しながら、難所に鉄道を敷設しなければならなかった歴史的背景を具体的資料から考察する。その結果、日清戦争に必要な物資を可能な限り早く輸送できるように、日本国が主導して広島までの最短ルートで鉄道を敷設したこ

とを理解する。「③難所を克服するためにどんな工夫がされてきたのだろうか？」では、八本松方面から機関車が単機で瀬野方面に走行する動画や、現在の在来線の走行する様子の動画、瀬野駅と八本松駅に機関区があったことを示す資料から、補助機関車を列車の後方に取り付けること、特殊な抑速ブレーキをかけることで難所である「瀬野八」を克服していることに気付く。

終結部の「⑤八本松駅にあった『名所案内』看板を新しくデザインしよう！」では、展開部で学んだ知識を活用し、「瀬野八」という全国的にも知られている地域の特色について紹介する看板のデザイン案を考え、地域の魅力を発信しているパフォーマンス課題に取り組む。

【キーワード⑤ 農産物直売所】作成者：高見史織

(1) 中心発問

福富町で農産物直売所はどんな役割を果たしているのだろうか？

(2) 授業のねらい

福富町にある2つの農産物直売所について、それらの出品者と売り物、施設の特徴を考察することを通して、自分の町にふさわしい農産物直売所を考え提案することができる。

(3) 探究の概要

導入部では、普段、私たちが食べる野菜をどこで買っているか思い出し、スーパーだけではなく、「農産物直売所」というものがあるということに気づかせる。

展開部は、大きく4ページで構成される。「①『直売』ってなんだろう？」では、直売所とスーパーの比較を通して、直売所では、農産物が、卸売市場や農協を仲介することなく出荷されていることを理解する。「②農家さんはなぜ農産物直売所に野菜を出荷するだろう？」では、直売所に野菜を出荷する生産者の話を聞くことを通して、高齢の生産者が多い福富町において、直売所が彼ら彼女らの仕事を守る重要な役割を果たしていることに気づく。「③『しゃくなげ館』と『道の駅』の売りものをくらべてみよう！」では、福富町にある2つの農産物直売所の売り物を比較し、「しゃくなげ館」は地元の町でとれる農産物を中心に売っているのに対して、「道の駅」は地元のものだけではなく市内の様々な場所でとれる農産物も扱っているということを確認する。「④『しゃくなげ館』と『道の駅』のしせつをくらべてみよう！」では、

2つの農産物直売所の施設の特徴を比較し、「しゃくなげ館」はオリジナルの加工品を生産・販売できること、「道の駅」は商品だけではなく施設内の大型遊具やイベントを目的にお客さんが訪れることに気づく。こうした③④の学習を通して、「どこを何を売るのがか」「どんな目的のお客さんに来ようか」の違いによって、その地域における農産物直売所の役割が変化することに気づく。

終結部の「⑤あなたのまちの新しい農産物直売所を提案しよう！」では、展開部で学んだ知識を活用し、どのような役割を持った農産物直売所が、自分の町にあったら良いか考え、提案するパフォーマンス課題に取り組む。

【キーワード⑥ 子どもかぶき】作成者：高見史織

(1) 中心発問

なぜ白市で子どもかぶきが行われているのだろうか？

(2) 授業のねらい

白市の子どもかぶきについて、交通と商業の発展の歴史から考察することを通して、白市の伝統・文化が継承されつづけた理由を説明することができる。

(3) 探究の概要

導入部では、高屋町白市の小学校で、子どもかぶきが行われていると知ること、「かぶき」と白市の関わりについて興味・関心をもつ。

展開部は、大きく5ページで構成される。「①子どもかぶきってなんだろう？」では、子どもかぶきの特集が載った広報紙を読んだり、かぶきを教える地域の人のお話を聞いたりすることを通して、白市の町を盛り上げたいという人々の願いから、子どもかぶきが始まったことを理解する。「②昔の白市はどんな様子だったのだろうか？」では、白市に残る民謡の歌詞を読むことを通して、白市が、賑やかな市が開かれていた商売が盛んな町であったと理解する。「③今の白市はどんな様子なのだろうか？」では、白市の街並みの写真を観察することを通して白市に残る建物が豪華で立派なものであると気づき、かつての白市には、豪商が多くいたことを理解する。「④なぜ白市では市がひらかれたのだろうか？」では、白市が、広島、尾道、三次などの大きな町の間点に位置し、交通面で多くの人や物が集まりやすい場所であることに気づく。

「⑤なぜ白市でかぶきが行われていたのだろうか？」では、かつてサーカスや動物園を呼び寄せ、

多くの客を楽しませていたという事実から、歌舞伎も客を楽しませる娯楽の1つとして呼んでいることを理解する。

終結部の「⑥白市で『かぶき』が受け継がれている理由をカードで説明しよう」では、展開部で学んだ知識を活用し、白市で子どもかぶきが行われている理由を、「商売」「交通」「娯楽」の関わりを踏まえながら、カードを用いて説明するパフォーマンス課題に取り組む。

【キーワード⑦ ごみ袋】作成者：篠田裕文

(1) 中心発問

なぜごみ袋にお金がかかるのだろうか？なぜ分別しないといけないのだろうか？

(2) 授業のねらい

東広島市のごみ袋の有料化の理由とごみ分別の必要性を廃棄物の削減と資源化の視点から考え、市全体の廃棄物減量に向けて行動することができる。

(3) 探究の概要

導入部では、ごみ袋が有料の東広島市に対して、ほかの市町村にはごみ袋に費用がかからない地域があることを理解し、市ならではの理由があることを意識する。

展開部は、4ページで構成される。「①東広島市にはどんなごみ袋があるの？」という①の前半部では、家庭系ごみ指定袋（オレンジ色・紫色）と事業系一般廃棄物専用ごみ袋（青色・赤色）の写真から、子どもたちが普段から使用しているごみ袋を確認する。「①ごみ袋はどのように運ばれるの？」という①の後半部では、パッカー車にごみを積む作業などの写真から、ごみ袋がゴミステーションから賀茂環境衛生センターや賀茂環境センターへ運ばれる過程を確認する。「②なんでごみ袋にお金がかかるの？」では、1リットルあたりで各ごみ袋にかかる費用を計算して比較することで、家庭系よりも事業系、資源ごみ用よりも燃やせるごみ用の方がより費用がかかることを理解する。その後、全国・広島県・東広島市の市民1人が1日出すごみの量を比較したグラフを見て、東広島市民は排出するごみの量が多いこと、市がごみ減量目標を掲げていることを理解する。「③どのようにごみを分別するの？」では、「東広島市家庭ごみの出し方」を実際に読み解き、新聞紙やペットボトルのキャップとラベル、アイスの袋と棒の分別の仕方を理解する。「④なんでごみを分別しないといけないの？」では、不要な「小さな服」に対して廃棄・リサイクル・転売といった異なった対

処方法の考え方の比較や3R（リユース・リデュース・リサイクル）を関連させる作業を行う。そして、これまでの学習を踏まえた上で、市がごみ減量のためにごみ袋を有料化し、減量にはごみの分別が必要となるという関係を理解する。

終結部の「⑤〇〇小学校のごみをへらそう大作戦を考えよう！」では、展開部で学んだことをふまえ、ごみ減量や分別に関する啓発ポスターを作成するというパフォーマンス課題に取り組む。

【キーワード⑧ 消防署】作成者：篠田裕文

(1) 中心発問

消防署はどうやってわたしたちのくらしを守っているの？

(2) 授業のねらい

消防署の災害対応と災害防止という役割と、迅速な災害対応のために施された署の位置並びに通信指令システムの工夫を理解し、市の安全のために個人や社会でできることを考えることができる。

(3) 探究の概要

導入部では、非常時に消防車や救急車が駆けつけることを理解し、社会の安全を守る消防署の役割を意識する。

展開部は、5ページで構成される。「①どれだけ火事が起きているの？」では、東広島市において年間で火事が起きた回数とそれによる死傷者を表すグラフを通して、市内での火事の現状を把握すると共に、その危険性を理解する。「②消防署はどこにあるの？」ではまず、地図を見ながら、東広島市消防局が東広島市以外にも竹原市や豊田郡大崎上島町を管轄していること、各地に分署があることを確認する。また、署内外の写真を基に車両の台数を確認する作業を通して、消防局と分署の違いを理解する。さらに、地図上に消防署や分署を中心とした円を描く作業を通じて、東西南北に存在する署の担当地域を理解した上で、新しい分署をどこに置くのが良いかを考える。「③つうほうから消火活動までの流れはどうなっているのだろうか？」では、安芸津町での火災発生から消防隊員出動までのプロセス図や隊員の出動準備動画（訓練）を見ることで、災害対応に関わる通信指令システムや隊員の具体的な動きや装備を理解する。「④消防署の人はどんな仕事をしているのだろうか？」では、災害対応以外を表す写真から、消防署の人が救助・救急訓練や防災施設点検、市民が行える救助講習を日々行っていることを理解する。「⑤消防署の中にかくされているものはなんだろう

う？」では、消防署内の体験ブースを備えた防災センターの写真を確認し、「安全を守る」施設という側面だけでなく、予防のために「安全を学べる」施設としての消防署が持つ役割を理解する。

終結部の「⑥消防署や防災センターの「みりよく」を伝えるパンフレットをつくろう！」では、実際に消防署へ行って防災の学びの啓発パンフレットを作成する。さらに学びたい人には「もしも町に消防署が無かったら」というまとめの作文を書く。

【キーワード⑨ 藤原春鶴】作成者：正出七瀬

(1) 中心発問

藤原春鶴ってどんな人だろう？

(2) 授業のねらい

藤原春鶴の人生や社会的功績を地域に残る石碑や資料から読み取ることを通じて理解しその評価や意義を発信しつつ、地域にのこる石碑が果たす役割を考察できる。

(3) 探究の概要

導入部では、「藤原春鶴（ふじわらしゅんじゃく）という名前を聞いたことがありますか？」という問いから始まる。藤原春鶴は『東広島の歴史事典』などには記述があるが、東広島市内の児童が使用する社会科副読本『わたしたちの東広島市』には記述がなく、市民にはあまり馴染みのない人物である。今回の地域学習用デジタルコンテンツ化に際し新しく教材化した人物であるため、このような導入とした。

展開部は、大きく 4 ページで構成される。「①藤原春鶴ってどんな人？」では、児童による周りの人に対する藤原春鶴についてのインタビューから始め、現在は必ずしも馴染みのある人物ではないことに気づく。その上で春鶴の基礎データを示し、春鶴を称える功德碑が市内の築地神社にあることを知る。「②藤原春鶴を地いきの人々はどのようにお思っていたのだろうか？」では、実際に築地神社の写真をみて、功德碑とその説明板の記述内容を読み解き、地域住民の春鶴に対する感謝の気持ちを理解する。「③藤原春鶴のお墓に行ってみよう！」では、墓も石碑として功績が書かれていることに気づく。「④藤原春鶴をもっとくわしく調べてみよう！」では、春鶴に関わる年表をもとに、当時の時代背景をふまえて社会的功績や社会的評価について考察する。具体的には、江戸時代から明治時代への社会変動の中で、飢饉に対する寄付や長州征伐での治療活動、小学校の建設等におけ

る春鶴の貢献を理解し、行動の意味を考える。また、それを今でも私たちがこのように読み解き知ることができる石碑の役割を認識する。

終結部の「⑤藤原春鶴の子ども向け説明板をデザインしよう！」では、功德碑の看板を子ども向けにアレンジする。さらに学びたい人は、東広島市内に多く存在する石碑等に対する探究も促す。

【キーワード⑩ 広島大学】作成者：守谷富士彦

(1) 中心発問

広島大学ってどんなところだろう？

(2) 授業のねらい

広島大学の位置や構成員を事例に、大学の機能を教育・研究・社会貢献の視点から説明し、広島大学のよりよい社会に向けた取り組みを調べて評価し、発信することができる。

(3) 探究の概要

導入部では、広島大学が大学であることを確認し、大学とはどのような場所なのか、大学の先生や学生はどのようなことをしているのか、という疑問をもつ。

展開部は、大きく 4 ページで構成される。「①大学ってなんだろう？」では、大学が小学校・中学校・高等学校の先にあるレベルの高い知識や技術を学ぶ学校であること、様々な年齢や留学生もおり多様性に富んでいることに気づく。「②小学校の先生と大学の先生はどこがちがうの？」では、具体的な大学教員の生活やパンフレットの分析を通して、大学は教育機関だけでなく研究機関でもあり、他大学や企業と連携して新しい知識や技術を生み出していることに気づく。「③大学はだれのために、なんのためにあるの？」では、その新しい知識や技術は市民や世界の人々のために活かされており、広島大学は特に平和活動に力を入れていることを理解する。「④広島大学が広島県のナカだけでなくソトにもあるのはどうして？」では、広島大学が 3 つのキャンパスのほか日本中・世界中にオフィスをつくる理由を考察し、教育や研究を通して社会貢献をするという大学の使命を果たそうとしていることに気づく。

終結部では、「⑤広島大学の『イチオシニュース』を取材して記事にまとめよう！」では、広島大学の多種多様な取り組みから 1 つ選び、その事業主体、内容、目的についてまとめ、大学の機能の視点からニュースにまとめるパフォーマンス課題に取り組む。

4 活用事例「東広島市立図書館連携講座」

(1) 講座の実施状況

上述の経緯を経て開発された「のん太の学び場」は、どのように活用しうなのか、またどのように改善されるべきなのか。この問いを検証するため、筆者らは東広島市立図書館と連携し、地域の小学生らを招いて実際にデジタルコンテンツを利用してもらう講座を実施した。本章では、当該講座の実施状況と、講座参加者から寄せられた評価について紹介する。

当該講座は、2019年9月23日（月・祝）の13時から16時まで、東広島市立中央図書館にて実施された。講座運営者である大坂らは、「児童がデジタルコンテンツ内の10のキーワードについて深く理解すること」「児童が自ら設定し探究したテーマについて、成果を他者に向けて表現できること」などを目標に掲げて講座の内容を構想した。

参加者は、インターネットや当日の図書館での広報を通じて集まった、東広島市周辺に在住の小学3年生から6年生計8名とその保護者（約12名程度）であった。講座実施者は、広島大学の構成員である教員、教育研究推進員、大学院生の計6名であった。子どもたちの主体的な学びを支援するために、参加児童を2名ずつ4つの小グループに分け、グループ毎に実施者である大学院生が1名ずつ入る体制をとった（資料1）。



資料1 講座の様子

プログラムの構成は表3の通りである。講座を進行する2名が全体の司会進行を進めつつ、講座の大部分を占める作業時間中は、児童の探究活動の支援（デジタルコンテンツの扱い方、疑問や質問への対応、成果物づくりのアイデア出しなど）を各グループ担当の大学院生が担当した。講座で使用したタブレット端末の準備や、図書館の蔵書や資料のレファレンスにあたっては、東広島市図書館および図書館職員の協力を仰いだ。

表3 当該講座のタイムスケジュール

<p>【導入】13:00～13:15</p> <ul style="list-style-type: none"> ・開会の挨拶 ・一日の流れと講座目標の説明 ・デジタルコンテンツへのアクセス確認など
<p>【1時間目】13:15～14:00</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「のん太の学び場」のコンテンツ、機能紹介のためのオリエンテーション ・自分の好きなキーワードを決め、近いキーワードの人同士で小グループをつくる ・実際に読み進めていく、わからないことはスタッフにきく ・わかったこと、疑問などをグループ内で共有
<p>(小休憩) 14:00～14:10</p>
<p>【2時間目】14:10～14:55</p> <ul style="list-style-type: none"> ・探究のテーマぎめ（以下のいずれかを選択） Aタイプ 「〇〇（キーワード）について、お父さんやお母さんに伝えたいこと・知ってほしいことをもっと詳しく調べよう！」 Bタイプ 「まとめのページにある課題を、自分でやってみよう！」 ・テーマについてスタッフと一緒に調べる ・作品作りに向けたプランを構想する ・スタッフの支援のもと作品づくり
<p>(小休憩) 14:55～15:05</p>
<p>【3時間目】15:05～15:50</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スタッフの支援のもと作品づくり（続き） ・グループ内で作品発表 ・各グループのスタッフが、全体に向けてグループ内の全作品について報告する ・講師と図書館長からのコメント
<p>【終結】15:50～16:00</p> <ul style="list-style-type: none"> ・修了証の授与、閉会あいさつ、記念撮影 ・アンケートの記入、回収

（筆者作成）

当日は、ほぼ当初のスケジュール通りに進行した。参加した児童は、「酒づくり（2名）」「ため池」「瀬野八」「ごみ袋」「消防署」「藤原春鶴」「広島大学」の各キーワードについて、タブレット端末や図書館の蔵書を参照しながら学習し、自ら設定したテーマを探究・発表した。

(2) 講座参加者からの評価

当該講座に参加した児童と引率の保護者に対し、講座およびデジタルコンテンツの評価に関するアンケートを依頼したところ、参加児童8名全員と、

その保護者 7 名分の回答を得た（1 枚の用紙に集約して回答する保護者が多く正確な数は不明）。

児童に実施したアンケートでは、講座は楽しかったか、デジタルコンテンツは使いやすかったかといった項目を 4 件法で評価してもらった。結果、学習したキーワードや学年段階を問わず、ほぼ全員が全ての項目で最高との評価を下しており、満足度や操作性に不満は見られなかった。今後追加してほしいキーワードに関する自由記述では、「図書館」「広島城」「東広島の歴史」が挙げられた。

保護者（引率者）に実施したアンケートでは、全員が開発したデジタルコンテンツを「使わせたい」、無回答 1 名を除くほぼ全員が次回以降もこのような講座があれば「参加したい」と回答するなど、極めて高い評価を得た。一方で、「3 時間ではなかなか（成果が）まとめきれなかったようです」「夏休みの連続講座など継続できると達成感がある」など、今後もデジタルコンテンツの活用に関する講座を継続的に開催してほしいという希望が複数寄せられた。

5 研究の成果と今後の展望

本研究の成果として 2 点が提示できる。

第 1 に、探究的な学びを支援するデジタルコンテンツのデザインと具体的内容・構造を構想し、実際に開発した点である。単に地域社会の特色を理解するだけでなく、地域社会の特定の題材の探究を通して、社会の一般的（普遍的）な概念に関する認識を形成する地域学習用教材を開発する方法論を示すことができた。他地域でも同様のデジタルコンテンツの開発に期待したい。

第 2 に、デジタルコンテンツの活用方法の例を示した点である。図書館と連携した出前講義を行い、高い評価を得たことで、デジタルコンテンツの有効性を一定程度確かめることができた。今回のように、開発者がデジタルコンテンツの活用法に関する講座を実施することで、より普及を促進させることができるだろう。

最後に、今後の研究の発展可能性として、デジタルコンテンツの開発が教師教育に果たす役割についての展望を示したい。本デジタルコンテンツは、学部生・大学院生がプロジェクトメンバーとして参加した。参加学生に実施した、教育観の変容に関するリフレクションシートでは、「子どもの立場に立って教材を作成すること…（中略）…探究プロセス内の平易な表現や具体的な写真、子どもが行うと考えられる思考のプロセスなど」につ

いて留意したことや、「学習者の視点に立って、資料作りを心がければ、若干高度な内容も教授することが可能になる」など、学習者の視点からの教材づくり・学習過程づくりの重要性への気づきがみられた。このことは、教員を志望する学生たちにとって、当事者としてこのようなデジタルコンテンツの開発・活用に関与することが、彼らの専門性開発やモチベーションの向上、自身の教育観の省察などにつながる可能性を示唆している。本稿で実施したような地域教材の開発プロジェクトは、「学生自身が地域で人々と触れあう直接的経験（伊藤・小野, 2014）」を作り出す機会としても有効に機能しうるのではないだろうか。

引用・参考文献

- 安藤雅之（2010）「小学校中学年の内容と方法」
原田智仁編『社会科教育のフロンティア』保育出版社、pp.41-44.
- 伊藤貴啓・小野晃伸（2014）「教員養成大学における社会科教員としての資質能力の育成と社会科読本の協同的作成—大学院生による地域教材開発力育成の試み—」『教科教育学論集』第 2 号、pp.43-54.
- 岡崎均（2018）「小学校社会科デジタル副読本の設計と開発に関する研究—愛媛県南予地方の水産業教材の事例開発を手がかりに—」『社会系教科教育学研究』第 30 号、pp.77-86.
- 岡崎均（2019）「社会科デジタル教科書設計論—教科書の構造分析とマルチメディア教材設計論に基づく小学校第 5 学年の事例開発を手がかりに—」『日本教科教育学会誌』第 41 巻第 4 号、pp. 1-13.
- 永田忠道（2000）「郷土学習」森分孝治・片上宗二編『社会科重要用語 300 の基礎知識』明治図書、p.159.
- 東広島市教育委員会（2016）『わたしたちの東広島市 小学校社会科副読本 平成 28 年度版 小学校 3・4 学年用』
- 山根栄次（2000）「同心円の拡大法」森分孝治・片上宗二編『社会科重要用語 300 の基礎知識』明治図書、p.159.

謝辞

本デジタルコンテンツの制作、および講座の実施にあたり、東広島市生涯学習課、東広島市立図書館、(株)図書館流通センターの皆様にご多大な協力を頂いた。ここに記して深く感謝申し上げます。